

卓球部創設三十周年を迎えて

藤崎 真佐五

廊下を歩いてしているとピンポンの音がする。教室をのぞくと、机を並べて卓球台がわりにして打ちあつて居た。球が外れると、机や椅子を除いて、捜すのにひと苦労で、やっと見つけては又打ちあいを始める。その傍には、四、五人が自分の番の来るのも待ち遠しく、球と共に首を左右に振っている。

こんな風景が各教室に見られるので、その様子を職員会議に訴えて、卓球部を認めてもらつてから三十年経過、昨年の記念祭の集りで部員の皆さんから知らされ、月日の立つ早さを改めて思う次第です。

自分が卓球部の世話役を御受けたのも以上のようなかわりで、校務分掌の一端として御手伝いをして来た訳です。毎年、新年度にはクラブ関係の顧問の先生方が変わりますが、川嶋、古川、中沢（義）先生をはじめ、本校を去られた加藤、草切両先生にも何かとお世話になり、現在に至りました。

創設当時の先輩田中恒夫氏、荻村伊智朗氏等の並々ならぬ猛練習や苦労話は、後輩の諸君も機にふれて伺っていることですが、残念なのは、当時のスコアや練習の様子を記録した数冊にのぼるノートが行方不明になっていることです。部員の誰かが書棚のすみに預り忘れていたかも知れず、思い出し、見つけて戴ければ幸いです。

戦後の日本が敗戦で暗い世相のただよう中を、荻村氏が、ロンドンに於ける世界卓球選手権大会で優勝し、明るいニュースをもたらし、またピンポン外交として、中国との国交の基礎を築いてくれた事は余りにも有名です。各国での卓球が盛んになり、有名な外国選手のほとんどが荻村氏のコーチを受けていたと思います。

以来夏の合宿、十月の記念祭など、折を見て後輩の為に忙しい中をコーチに来てもらったり、また一流選手を迎えて、体育館で模範試合を行ったりして、卓球部の為に尽力されていることは、部員の一層のはげみとなりました。特に、昨年(五十年六月末)行われたサウジアラビアの選手と西高の現役やOBの国際親善試合は、荻村氏並びに同窓の平島氏のお骨折りもあり、全校生徒に深い感銘を与えると共に、その応援の仕方、国際的なエチケットの勉強になりました。

校舎も改築が終り、体育館でも、やっと教台の卓球台を並べて練習が出来るようになり、部員も常に三十名以上、毎日クラブ活動に余念がありませんが、技術の点は第三学区でやや強い方で、高校の選手権を取るのはまだまだ夢でしょう。

勝つことだけがスポーツの目的のように思われがちですが、クラブ活動を通しての先輩後輩のふれあいや、自己の精神肉体の修養こそ大切でしょう。現役の諸君は、この三十年の長い間の先輩諸氏の歩みを土台にして、益々技術面のみでなく、人格の向上にはげんで戴きたい。